

「私が志す酪農」

帯広畜産大学
畜産科学科 3年 早川 翔子

私の将来の夢は酪農家になることだ。この夢を持ったのは高校二年生のときだ。進路を決める際、動物と自然が好きな私に合う職業はなんだろう、と考えたとき「酪農家」が良いのではないかと思った。私はずっと福岡に住んでおり、近くに牧場があったわけでもなく、知り合いに酪農家があったわけでもない。まして本物の牛さえ見たことがなかった。広大な土地でのんびり牛を放牧させる、私の酪農に対するイメージはそういうものであり、そのイメージだけから「牧場をやりたい!」と思ったのである。そしてその夢を叶えようと北海道にある帯広畜産大学に入学した。

酪農に関する知識が全くなかった私は、授業で習うことすべてが新鮮だった。牛はどうやったら乳が出るのか、その乳はどのようにして搾っているのか…そんなことさえ知らなかった。いろんなことを知れば知るほど牧場をやりたいという気持ちは強くなった。そして、酪農家で搾乳のアルバイトも始めた。アルバイトを始めて驚いたのは、その牛はつなぎ飼いで一生つながれていることと、牛体が糞まみれであったことだ。それに、牛に蹴られそうになることもあるし、力仕事も想像以上にたくさんある。私のイメージしていたものとはかけ離れた世界がそこにはあった。同時に、学校の授業でも、酪農が引き起こす環境汚染や現在の酪農の置かれている状況などを学び、酪農の現状を突きつけられた。

しかし、ほかのアルバイト先の農家さんや、実習や見学に行った先の農家さん、学校に講演に来てくださる畜産関係の方のお話を聞くと、「現状は厳しいけど、やりがいのある仕事で、何より牛が可愛い。」とおっしゃり、キラキラ輝いているのを見ると、私も初心を忘れずに、自分の理想とする牧場を目指して頑張ろうという熱い気持ちにさせられた。

特に、大学2年生の夏休みに友人と一緒に行った別海町の牧場での実習は、私の「牧場をやりたい!」という気持ちをゆるぎないものにしてくれた出来事だった。実習先の農家さんとの出会いは、今考えると変わった出会いだった。友人と別海町にドライブに行ったときに、たまたま放牧後の牛を牛舎に戻すために道を横断させているのが見えた。その光景を見るのは初めてだったので、興奮しながらその光景を見て、その後牛舎を覗いたら、奥さんが「おいで～。どっから来たの?」と声を掛けてくれたのが始まりだった。そして搾乳までの1～2時間、気さくにいろんなことを話してくれて、夏休みにでも実習においでと言ってくれたのだ。まったくの赤の他人にも関わらず、こんなにも親しくしてくれるなんて、なんて寛大な人なんだろうととても感動した。そして夏休みには本当にお邪魔させていただいた。実習に行った時期は、牧草の刈り取り時期で、そのときはわからなかったが、今考えるととても忙しい時期で、それにも関わらず快く実習を引き受けてくれたことを考えると、感謝してもしきれないぐらいである。その牧場は、搾乳牛は40～50頭で日中は放牧、作業は奥さんと

旦那さんの夫婦二人で行っていた。二人ともおおらかな人で、その性格は牛も同じなような気がした。旦那さんは搾乳で牛を起こすときは「搾るよ～。起きて～。」と声を掛け、立たない牛にはポンポンと背中を軽く叩くだけで牛は起きていた。今まで、強く叩いたり、蹴ったりして起こす場面を見ていた私は本当に驚いた。奥さんも搾乳のときは、乳頭だけでなく乳房などもきれいに拭いてあげていた。とにかく牛に優しく接していて、そのため、牛もびくびくしたりすることはなかった。牛と飼う人の関係の重要性を目の当たりにした出来事だった。そして、牛1頭1頭にも様々な性格があると知ったのもこの実習だった。放牧地から牛が帰ってくる時、「この1頭だけはいつも寄り道して最後に帰ってくるんだ。」と旦那さんは言って、それでもイライラすることもなく、「搾るから帰っておいで～」と呼びに行っていた。ほかの牛についても1頭1頭の性格を把握していた。私が理想としていたものがここにはあり、こんな牧場もほんとうにできるとわかり、とてもうれしかった。また、奥さんが旦那さんが牧草の刈り取りをしている姿を見て、「うちの父ちゃん別海一トラクターの運転が上手いんだ。」とうれしそうに話していたのも印象的だった。私も将来、同じ夢に向かって歩いていける人と一緒に牧場をやりたいなと思った。別海で過ごしたのは1週間という短い期間だったが、初めての体験も多く、とても濃い楽しい時間を過ごすことができ、今まで以上に牧場をやりたいと思えるようになった。

酪農は、放牧だからいいとか、乳量が多いからいいとか一概には言えないが、私はとにかく牛が快適で健康的に過ごせる牧場を目指したい。滑りやすい牛床でひざや飛節を痛めたり、乳量がいくら多くても病気になりやすかったりするのは、人が見ていると痛々しいし、牛にとっても苦しいだけだからである。それに、消費者も健康な牛から搾られた牛乳を飲みたいはずである。現代の消費者は牛乳がどんな牛からどのように搾られ、どうやって食卓に上るかということ知らない人が大半である。知らないし、牛乳は健康な牛から搾られていると勝手に思い込んでいるのである。私も北海道に来るまではそのようなことは知らなかったし、「北海道＝放牧」と勝手に思い込んでいた。しかし、CMや牛乳のパッケージには青空の下で気持ちよさそうに草を食む牛が描かれているので、そう思い込むのも無理ない話である。だから私は牧場を作ったら、いろんな人に遊びに来てもらいたい。遊びに来て、見て、触って、酪農とはどんな仕事であるのかを知ってもらいたい。酪農関係の仕事をしているという人は、全国的に見ればほんの少ししかおらず、ほとんどの人は普段の生活で酪農について知る機会がない。酪農教育ファームやファームインなど伝える方法は様々あるが、私はまずは自分の福岡の友達に遊びに来てもらい、酪農について話し、知ってもらいたい。そしてその友達が今度は家族や別の友達を連れてきて、酪農を知ってくれる人がだんだん増えていくといいなと思う。そうやって酪農を知るきっかけを作って、日本の農畜産業の現状や自分たちの食について考える人が少しずつでも増え、食に対する関心が今よりも高くなる手伝いが

ささやかでもできる酪農家になりたい。酪農という仕事は、家を離れることはできないので、限られた人との関わりが多くなりがちであるが、このようなことを行うことによって、いろいろな人とのコミュニケーションの輪も広がるし、自分が教えるだけでなく、酪農以外のことを教えてもらえるきっかけにもなるだろうと私は考えている。

牧場をやるには、飼料や燃料の高騰、経営面、金銭面など様々な不安があるが、前に述べたようなことが実現すると考えただけでもとても楽しみだし、なにより私はやっぱり牛が大好きなので、これからどんな困難なことがあっても「牧場をやりたい!」という夢に向かって進んでいきたい。そのためにも、学校での日々の勉強や、搾乳のアルバイトなどをがんばり、実習や講演会にも積極的に参加し、いろいろなことを学んでいこうと思う。
